

【研究ノート】

ブヒクロサン (Buhicrosan) 夫妻と日本人村についての考察

Consideration about Mr. and Mrs. Buhicrosan and a Japanese village

伊藤 大祐*

Daisuke ITO

1. はじめに

日本人村とは、日本を模した空間で、日本人の風俗を見せると言う見世物的な興行の事で、日本人の職人による工芸品作成の実演と販売や、日本人の芸人による軽業や撃剣の上演、水茶屋の経営が行われていた。

このような興行が行われた背景には、ロンドン万国博覧会 (1862) への出品、ウィーン万国博覧会 (1873)、パリ万国博覧会 (1867、1878) への参加、日本の軽業見世物が海外で興行されてきたことによって日本への関心が高まり、興行主に興行を行えば必ず利益が出ると言う思惑があったからであろう。日本人村と名のつく興業の多くは好評を収め、最初の日本人村の興業である1885年のイギリス、ロンドンのナイツブリッジで行われたタンナケル・ブヒクロサン (Tannaker Buhicrosan) による日本人村 (Japanese Native Village) を皮切りに、欧米で日本人村の興業が行われるようになり、詳細は分からないが多数の日本人村の興業が行われたようである¹。海外では好評を持って受け入れられた日本人村であるが、日本においては職人や芸人らの下賤な振る舞いが国体を傷つけるとして、批判が絶えなかった²。日本からは批判の絶えない日本人村であったが、1910年の日英博覧会においては、イムレ・キラルフィ (Imre kiralfy) の要請に応じる形で日本人村の興業が行われ、それまでの日本人村同様に海外からは好評を得て、日本からは批判を受けている³。

日本人村興業の研究は、明治初期の欧米における日本の見せ物興行、欧米から見た日本観及び、欧米の眼差しを通した日本人の自己認識を考察する上で、重要な意義があるが、まとまった研究と言えるものは、倉田喜弘の『1885年ロンドン日本人村』しかない。『1885年ロンドン日本人村』は日本人村に参加した日本人を中心に研究したもので、当時の政府の対応や日本人の見た日本村について詳しくまとめられている。

本稿では、1885年イギリス、ロンドン・ナイツブリッジにおける日本人博覧会について、当時の報道及び記録から、興行主であるタンナケル・ブヒクロサンの足取りを追い、軽業興行から博

* 國學院大學大学院文学研究科史学専攻 博士課程2年

覧会形式の見世物である日本人村への変遷を、タンナケル・ブヒクロサンとその妻で日本人であるオタケサン・ブヒクロサン (Otakesan Buhicrosan) を中心として研究するものである。

2. タンナケル・ブヒクロサンと日本人村

日本人村の計画が初めて、日本で報道されたのは1884年7月26日の郵便報知新聞によるものであった。

日本風俗博覧会 長崎、神戸の両港に久しく在留して日本の風俗を熟知せる蘭人タナルカといふ者は、先年中、日本の女を迎へて妻となし、何か日本の風俗上の事を以て奇利を得んと工夫を運らせしすえ、其髪を蓄へて頭を野郎に剃り、丁髷を結ふて、「タナルカ」の「ル」の字を除きて田中と名乗り、自ら日本人の如く扮し、人力車夫、瞽女、按摩、願人坊主等、賤業の者数名を雇入れ、其見苦しき風俗のまゝ、自ら率ゐて英国に渡り、昼は一同を二、三輛の馬車に乗せ、分らぬ歌を謡はせながら太鼓を打囃して繁昌なる市街を乗廻はし、其評判を取り、夜は種々の訳の分らぬ日本風の芸尽くしを演ぜしめしに、奇を好むは世の人情なれば市街一般大評判となり、何所に於ても大当たりを取り以外の大金を得にければ、田中は得たりと同志数名と謀り、一の会社を組立て「日本風俗博覧会」と号し、日本にて各種の賤業を営む下等人民百名程を雇入れ、其見るに堪へられぬ風俗等を其まゝ見せ物にせんと企て、其会場を倫敦在の某村に設くることに決せしかば、右見世物に適すべき日本のがらくた人物仕入れの爲め、右社員が近々日本へ向け出発する由なるが、誠に苦々しき次第なりと、在英國の社友某より通信の端に記せり。⁴

タンナケルの企てた興行の名称はJapanese native villageであり、その他にJapan in Londonといった表現もされたが、それがなぜ日本風俗博覧会という名称で報道がなされたかは分からないが(後述するオタケサンの著作が日本人村のことを単にExhibitionと表現しているところがあることから日本人村を計画していた段階から、そう呼び習わしていたのかもしれない)、報道の大部分はタンナケルの行状を示すものとしてはおおむね正しいものであった。「自ら日本人の如く扮し、人力車夫、瞽女、按摩、願人坊主等、賤業の者数名を雇入れ、其見苦しき風俗のまゝ、自ら率ゐて英国に渡り、昼は一同を二、三輛の馬車に乗せ、分らぬ歌を謡はせながら太鼓を打囃して繁昌なる市街を乗廻はし、其評判を取り、夜は種々の訳の分らぬ日本風の芸尽くしを演ぜしめし」というのは日本人村の前身であるBuhicrosan's Japanese Troupeの事である。Buhicrosan's Japanese Troupeについては次の章で扱う。また、この時期にタンナケルの日本人村のために日本人の雇入れのために来日していた。

この郵便報知新聞の日本人村に対する反発は非常に強いもので、その翌々日の社説でこの日本人村(日本風俗博覧会)を痛烈に批判している。社説は「日本風俗博覧会に属する問題⁵」と題したもので、日本人村に参加する人々について「唯一個の日本人民と雖も場所と場合によりては一国全体に関するの日本人民たる者」として外国は新興国である日本に対して理解がないことから、彼らの姿を真に日本を表したものとしてとらえられるとして、「日本の国辱を売らんが為に

外国に往くものと云うへし」と批判し、「我国常に外人に対して我美を呈し以て我国の地位を上進するに汲々たり而るに一方より此等の行挙をなして国家の対面を汚損するものあらば我国人外邦に対して平素戒慎するの行実は何の用もなさざるなり」と当時の欧米に対する日本の劣等感と不平等条約改正に動いていた国情を述べて、「余輩は固より政府の民業に干渉するを悦ばざるものなりと雖も此等の事に関わりては断然之を制止するの至当なるを信ぜり」と政府による関与と注意を訴えかける内容である。

これらに対してタンナケルは抗議の為に8月18日に郵便報知新聞の本社を訪れて、当時郵便報知新聞の主幹であった藤田茂吉と面談しており、その様子は8月20日と21日の郵便報知新聞に「英人との対話」と題された記事になっている。面談に於いてタンナケルは日本人村の趣旨について以下のように述べている。

記者の新聞に誤報ありて甚だ迷惑を致すが為決して貴社にて報道したるが如きものにあらずして余が企てたる博覧会は日本の利益ともなるべきものなり貴社新聞には此博覧会に伴ふ日本人は職人人力車夫芸者など下等人種なりと見ゆたれども余の企は左にあらず実に上等の人物にて技術を長ぜる人を択び日本の技術を其の儘に欧羅巴人に示して其の品物を製造する様を示し直ちに之を販売するの見込にて決して賤しき人を伴ふて賤しき技を為さしむるにあらず⁶

つまり、日本人村は熟練した職人による実演と販売を行い、日本について広く紹介し、日本の益となるものであるとしている。また、自身については日本との関係を強調して

余は決して日本の為めにならざるとを企てず余は日本の婦人を妻に娶れり婚姻の時には日本の僧と欧羅巴の宗教師と立ち合ふて厳格の儀式を済ましたり現に八人の子供ありざれば余の妻は日本人にして余と妻との間に設けたる子供は即ち日本人にも異ならざるの縁故あり余は本国に於て学校寺院其外貧院病院に寄付金をなすにも日本人の名を以てせり故に日本人に対しては唯其品を高くせんことのみ勉むるのみ之れを賤くするが如きは情の忍びざる所なり此度の会も固より日本の利益となるを信ずるなり⁷

と述べ、タンナケルが真を語っているかは分からないが、タンナケルが日本人を妻とし、日本とのかかわりが長く、日本に対して深い関わりと知識を持っていたことは確かである。タンナケルは妻オタケサンとともに、1867年には、海外で日本人を率いて興行を行っていたからである。

3. 日本人村の前身、ブヒクロサンの日本一座 (Buhicrosan's Japanese Troupe)

タンナケルが日本に関わる興行をいつからしていたかは定かではないが、既に1867年に、オーストラリアに於いて興行を行っている⁸。タンナケル的一座は5人の日本人から成っていた。5人はツルキチ (Toorukichi)、ヒコノスケ (Hecoonuskhe) の男性2人と、オタケサン (Otakesan)、オトメサン (Otommesan)、ミツコサン (Mysqurkersyn) の女性3人である。このオタケサンはタンナケルの妻で、既に明治元年には芸人として行動を共にしていたのである。

ツルキチは軽業 (top-spinner) と投げ物を扱う曲芸 (juggler)、ヒコノスケは、軽業

(tumbler) と綱渡り (rope-walker) 投げ物を扱う曲芸 (juggler)、オタケサンとオトメサンは踊り、ミツコサンは三味線をそれぞれ芸としていたようである。タンナケルはこの一座で1867年の11月18日にメルボルンで興行を始め、1868年の10月6日にプリントンで興行を終えるまでほぼ一年間オーストラリアで興行を行っていた。

Maitland Mercuryによると、タンナケルは興行に於いて観衆に対して、日本の風俗や習慣、服装について日本の歴史について交えながら詳しく説明していてこれが好評であったという。その一例として、記事には日本人の女性が結婚すると歯をお歯黒で染め、眉を落としていたことが紹介されている。恐らくこの頃にはタンナケルの中では、日本人村の萌芽は芽生えていたであろう。タンナケルの興行における口上による日本の風俗や習慣の紹介が好評であったことが後の日本人村につながったことは想像に難くない。確認できた範囲ではタンナケルはこの後1873年まで日本人一座による興行を続けたが、何れの興業に於いてもこのような口上を行っていたのではないだろうか。1885年の日本人村の様子を伝える報道に

正面ニ舞台アリ日本風ノ襖ニテ作ル寄セ太鼓打ち終レバ英人一人舞台ニ出テ口上ヲ述ブソノ
趣意ハタナカルブヒクロサン氏此度日本人内地住居ノ模様コヽニ興行仕候家屋什具人間皆本
国ヨリ輸入シ職業ノ有様娛樂ノ景況一切此通相違無御座候マタ美人ヲ出シ手踊ヲ御覧ニ入レ
候又日本ニ在テハ茶ノ入レ様呑ミ方全ク当国ニ異リ牛乳ヲ用ヒズ砂糖ヲ交ヘズ時々ハ塩ヲ入
テ呑ミ候御注意ノ為メ併セテ如件ニ御座候云々⁹

とあり、1885年のロンドン日本人村でもオーストラリア興行を思わせる日本の風俗や習慣の紹介する口上がなされていて、ここに出てくる英人がタンナケルの事であるかは定かではないが、この口上が連続と続いて日本人村につながったことは確かと言えよう。

タンナケルはこの後、イギリスに向かい、1869年にロンドン¹⁰、1873年にマンチェスターで興行を行っている¹¹。1869年から1873年にかけての行動は不明だが、イギリスで興行を続けていたと推測できる。

1873年のマンチェスターにおける興行については、Manchester Guardian (図版1) にブヒクロサンの日本一座による興行の広告が載っており、それによって、このときの日本人一座の様子を窺い知ることが出来る。この広告によると、タンナケルはさよなら公演として、比較的規模の大きい会場を取り興行を行ったようである。このさよなら公演がマンチェスターを去ると言う意味なのか、イギリスを去ると言う意味なのか、或いはブヒクロサンによる興行の終了を示しているのかは分からないが、調査した範囲ではこの後のタンナケルの足取りは1884年の日本人風俗博覧会の報道まで不明である。

このマンチェスター興行における演目とメンバーは以下の通りである。

Paper screen-performance on the sole of the feet, by CONDERTORRO.

Japanese juggling, stick, ball cup, ring, and umbrella spinning, by GODISON.

YASSO and TORAKITSCHÉ, peculiars (peculiaris?), postures.

Acrobats, barrel spinning, by TOMMYKECHIE.

Great ascent on a slanting slack rope at an angle of 45 deg. by Miss OMOTOSAN.

Tran-formation scene, by TOMMY THE WOLF.

The Great ladder feat, by little "ALL RIGHT,"

Small and large tub balancing on the feet of GODAION. ¹²

T H E T O U R O F T H E T A N N A K E R
near Portland-street, Oxford-street.
TANNAKER BUNICHIRO SAN has great pleasure in announcing
that he has engaged the above New and Magnificently Appointed
Hall for

EIGHT FAREWELL PERFORMANCES

of his

ORIGINAL JAPANESE TROUPE,
THIS (Friday) EVENING, December 20, and following nights,
at eight o'clock,

when the following Renowned Artists will appear in their
WONDERFUL ENTERTAINMENT:—

Esper Screen-Performance on the Soles of the Feet,
by **CONDERTORRO.**

JAPANESE JUGGLING.

Stick, Ball Cup, Ring, and Umbrella Spinning,
by **GODISON.**

YASSO and TORAKITSCHIE, Peculars, Postures, and Acrobats.
Barrel Spinning, by **TOMMYKECHIE.**

Great Ascent on a Slanting Slack Rope at an angle of 45 deg.
by Miss **OMOTOSAN.**

Transformation Scene, by **TOMMY THE WOLF.**

The Great Ladder Feat, by Little "All Right."

Small and Large Tub Balancing on the feet of **GODAION.**

And a host of other marvellous tricks never attempted by European
Artists.

DAY PERFORMANCES IN CHRISTMAS WEEK,

THIS DAY (Friday) and Saturday.

NEW YEAR'S WEEK, Thursday and Friday.

Commencing at three o'clock each day.

The Performances of these Children of the East are pronounced by
the whole of the European Press to be unapproachd.

Admission: Reserved seats, 2s. each; Body of Hall and Gallery,
1s. each.

図版1 「Manchester Guardian」

タンナケルの名とORIGINAL JAPANESE TROUPEについての記載が見える。

広告に見られる人名はCONDERTORRO (コンドータロー?)、GODISON、YASSO (ヤスオ?)、
トラキチ (TORAKITSCHIE)、トミキチ (TOMMYKECHIE)、オモトサン (OMOTOSAN)、
TOMMY THE WOLF、little "ALL RIGHT" である。オーストラリアにおける興行に比べて人
数が増えていることから、規模が大きくなっていることが窺える。この内、トラキチ、トミキチ、
オモトサン、little "ALL RIGHT" の4人は名前から日本人であると推測できるが、ほかの4人
は日本人であるか不明である。Little "ALL Right" のALL Rightは当時の日本人が海外公演に
おける芸名として一般的なもので¹³、子供の芸人の芸名としてLittle "ALL Right" は一般的であ

った¹⁴。子供による芸は人気があったようで広告にLittle “ALL Right” のようなわかりやすい芸名を載せていることから、タンナケルの機微が窺える。この後のタンナケルの足取りは明らかではないが、マンチェスター興行における演目やTOMMY THE WOLFの名称が日本人村における興行のプログラムにも見えるため¹⁵、12年の開きがあるが、タンナケルのイギリス興行が直接日本人村につながっているとみてもよいと思われる。また、郵便報知新聞の「自ら日本人の如く扮し、人力車夫、瞽女、按摩、願人坊主等、賤業の者数名を雇入れ、其見苦しき風俗のまゝ、自ら率ゐて英国に渡り、昼は一同を二、三輛の馬車に乗せ、分らぬ歌を謡はせながら太鼓を打囃して繁昌なる市街を乗廻はし、其評判を取り、夜は種々の訳の分らぬ日本風の芸尽くしを演ぜしめし」というのは、イギリス時代に宣伝のために行っていた事であろう。

タンナケルが1867年に既に日本の風俗や習慣、服装について日本の歴史について交えながら詳しく説明する口上をしていたことから、タンナケルの興行は明治元年のオーストラリアにおける軽業興行という初期の段階から、すでに日本人村に向かい始めていたのである。それがイギリスに渡り、徐々に形を得ていったのである。

4. オタケサン・ブヒクロサンと日本人村

タンナケルの妻、オタケサンは日本人である。オタケサンは判明している範囲では1867年のブヒクロサンによる日本人一座のオーストラリア興行からタンナケルと行動をともにし、興行によって日本の一面を海外に見せるという行為をタンナケルと共に長年行ってきた。オタケサン自身はこの行為をどのように思っていたのであろうか。このオタケサンは、日本人村の興行に際して『Japan, past and present: The manners and customs of the Japan (図版2)』という本を出版している。題名の通り、日本の歴史と日本の風習および習慣を解説したものである。『Japan, past and present: The manners and customs of the Japan』(以下Japan, past and presentと著記)は全161頁に及ぶ著書で

Introduction

Japan, Past and Present

Art Industries

Lacquer Work

Art Pottery

Metal Working, Casting, anti Bronzing

Printing Patterns on Fabrics

On Fabrics Figured in the Loom by Embroidery and by Combined Efforts

Embroidery

Silk Crape

Manufactures, Various

の11の項目から構成されていて、目次には載っていないが、最終頁に後書き (finis) が載ってい

JAPAN,
PAST AND PRESENT.

THE MANNERS AND CUSTOMS OF
THE JAPANESE.

◁ BY OTAKESAN BUHICROSAN. ▷

ALSO A DESCRIPTION OF

The Japanese Native Village,

(PROMOTED BY TANNAKER BUHICROSAN)

ALBERT GATE, HYDE PARK.

Daily, from 11 a.m. to 10 p.m.

—
SIX PENCE.
—

EDITED BY R. REINAGLE BARNETT,

And published by

THE PROPRIETORS OF THE JAPANESE NATIVE VILLAGE,
LONDON.

図版2 「Japan, past and present: The manners and customs of the Japan」

入場料 6 ペンス等The Japanese native villageについての記載があり、その下に出版「The proprietors of the Japanese native village, London (ロンドン日本人村経営者)」とある。

る。何れの章もそれぞれ日本について詳しく述べたものであるが、前書きと後書きにはオタケサンの日本人村に対する姿勢と日本観が述べられている。この項では、『Japan, past and present』の前書きと後書きから、日本人であると同時に興行主に最も近い立場にいた人物であるオタケサンの日本人村に対する姿勢を考察する。以下は『Japan, past and present』の前書きと後書きの拙訳による意識である。

Introduction

私には読者が本文に進む前に述べなければいけないことがあります。それは私が著作によって利益を得ようとしているというわけではないということです。

私は読者に私の国の芸術や産業について説明する一方で、私は日本人として力の及ぶ限り、才能にあふれ勤勉な人種が過去の方針と伝統から不利な立場に置かれていて、ヨーロッパ列強に対処を試みていることを訴える責任があると感じています。4半世紀前、日本は地図上で知られていたのみでした。日本人は半ば野蛮人として見られていて、交易により日本の優れた工芸品が西側諸国に紹介されることにより、注目に値すると認められるようになりました。これによりこの民族に興味を持った人々により情報が収集されて飛躍的にヨーロッパで認知されるようになりました。

18年間英国に住み、キリスト教を信仰した日本人女性として、私は博覧会を終えた後、日本の人々に帝国内を旅行させて、英国の人々の風習および習慣を説明し、宗教と市民の自由、ヴィクトリア女王による公平な統治を見せるつもりです。

従来通り、博覧会には完璧な村を作り、故郷の人々を住ませ、日本の産業、社会、生活を独特で総合的な方法で示しました。日本から各種業種の多くの日本人を呼び、建物、装飾物、彩飾、楽器、等々ほとんど知られていない日本の商業、芸術、産業、芸術的・経済的生産、および習慣について高等な博覧会を構成するのと同じような方法で揃えました。村は通りと店から構成され、陶磁器、金属加工、織物の製造、刺繍、絹、銅器、漆、飾り、彫刻、大工仕事、等々を熟練した職人がそれぞれの工程に従事しています。日本人村のスタッフ全員は和服を着ていて、プログラムはよく考えられたものなので、日本のあらゆる特徴が、その日の様々な時に完全に正確に実演されるでしょう。日本の珍しく独特な製品を作る熟練した職人によるすばらしい手法（他の国々のものと比較しても）について、十分な洞察力を得る機会が得られるでしょう。

できるだけ、私は様々な展示品について記述するよう努力しました。記述が英国の人々の要望に欠くならば、それは私の表現力に起因しています。ほとんどの専門的説明は、卓越した権威の著作を利用して著述しました。しかしながら、私は博覧会の見学者が、日本式の家屋と店舗で日本人が、自分の国でとおなじように仕事に従事し、その後に茶屋でお茶を飲んで一息つく様子を目にし、また村に加えられた新しい広いホールで「日本の劇やその他の日本特有の演芸」を見学することによって、私の国の人々の風習と習慣に対して少しずつ見識を得てほしいと願っています。

最近おきた大災難（火災）の再発を警戒して、私の夫が村を構成する家屋、店舗、木造部分に耐火性のある資材を導入し、日本人村に広い入り口と出口を設けたことをうれしく思っています。

Finis

最後に少し言葉を加えたいと思います。

本文中私は、祖国に関して公平に書き、かつ日本人が欧米に対して多くの点で注目に値することを証明しようと努力しました。しかし、日本は私が認める範囲で（欧米に対して）多くの点で遅れがあります。それも時間により改善されるでしょう。私は現在の天皇が日本民族の前進に向かう法案を絶えず導入していることを知り満足しています。天皇の支配下で、日本のモラルと社会状況を改善に向かっています。先進的なヨーロッパの制度が日本に導入され、日本の人々はその価値を認め、知識欲が制しがたいように、そのことに対して少しの疑問を持っていません。

私が日本についての報告をヨーロッパの言語で書き、それがドイツ字体で活字が組まれる、これは革新的なことです。私は推測します。やがて、私たちは同じ方法で印刷された本や新聞、パンフレットを持つようになるでしょう。日本の文字が象徴する象形文字は西ヨーロッパの人々には難解なものです。これが廃れることを望みます。そうすれば、日本語を勉強したいと思う人々は、あたかも英語やドイツ語、フランス語を学習するように容易に習得できるでしょう。それは大変価値のあることで、日本で政府が採用している新しい形式（書式）のすべてに可能性があります。

ヨーロッパ列強との関係を確立したい天皇は、Fonshimi王子という名の親類を派遣しました。彼はフランス、ベルギー、ドイツ、スイスおよびイタリアを通り、ニューヨークとサンフランシスコ経由で日本へ帰る途中で英国を訪れています。彼は訪問した国々の異なる形態の政治を緊密に研究して日本に報告するでしょう。

新しい体制が制定されることは確かなことです。それが悪い結果をもたらすことはなく、遠からず日本は正しい基礎に基づいて作られた議会を誇るようになり、天皇は文明の発達したヨーロッパの（日本に対する）尊重と賞賛を保証しただけでなく、日本が太陽の下の最も偉大な国家と評価されるようになったことに満足するでしょう。

『Japan, past and present』の出版時期が不明であるが、日本人村について進行形で書かれていること、火災に遭い火災対策をしたこと、Fonshimi王子が欧州に派遣されて英国を訪れていることが述べられていることからある程度時期が特定できる。まず日本人村が興行されていたのは、1885年から1887年までの事であり、さらに1887年に運営がタンナケルから別に移っていること、日本人村が火災に遭ったのは1885年の5月2日で同年12月2日には興行を再開したこと、Fonshimi王子とは恐らく小松宮彰仁親王のことで、小松宮彰仁親王の欧州差遣が1886年であったことから、『Japan, past and present』は1886年までに執筆され、本書の性質から1886年中に出版されたと思われる。また、執筆が1886年ならば、「18年間英国に住んで」という記述があることにより、1868年からイギリスに居を構えていたことになり、1868年の10月6日にオーストラリアのプリントンで興行を終えたことから、オーストラリアでの興行終了後すぐに渡英したと推測できる。そして、1869年にロンドンで興行を行い、1873年にマンチェスターで興行を行っていることから、1869年からはイギリスを拠点に活動していたと見て良いだろう。

『Japan, past and present』に見られるオタケサンの日本人村に対する姿勢は、熟練した職人による実演と販売を行い、日本について広く紹介し、日本の益となるという点ではタンナケルとほぼ同様である。やや異なるのは、強い日本への視線の存在である。欧米に対抗しようとしている日本の姿勢や変革について言及し、日本の情勢への強い関心が表れており、タンナケルも日本への愛着とも言える情を示していたが、やはりオタケサンは自身が日本人であるだけに、海外で生活することにより、日本への強い関心を持たざるを得なかったのである。恐らくIntroductionにある、「才能にあふれ勤勉な人種が過去の方針と伝統から不利な立場に置かれていて、主要なヨーロッパ列強に対処を試みていることを訴えることが責務であると感じている (ingenious and industrious race, who for centuries have laboured under many disadvantages, arising from an instinctive belief in the traditions and policy of the past, but who are now trying their utmost to cope with the leading Powers of Europe)」というのは、当時の不平等条約改正への動きを表しており、自身もそれを望んでいたのだろう。ならば何故、当時の日本の報道や政府が危惧したように連れて行った職人や芸人の振る舞いや日本人村そのものが国益を損なうことを危惧しなかったのだろうか。明治の初期には日本の芸人が海外で重用され、大きな利益を挙げたという自身の体験によるものか、或いは「自分が18年間英国に住んで、キリスト教を信仰した唯一の日本人女性であると考えて、博覧会を終えた後日本人の人々に帝国内を旅行させて、英国の人々の風習および習慣を説明し、宗教と市民的自由とヴィクトリア女王による公平な統治を見せるつもりです (Having resided in England for eighteen years, and believing myself to be the only Japanese female who has embraced and appreciated the blessings of Christianity, it is my intension, at the close of the exhibition, to return to Japan, and, in the interests of my country people and at my own expense, travel through the Empire and explain to the best of my ability the manners and customs on the English people, showing the religious and civil liberty they enjoy under a great and impartial administration, at the head of which is Her Majesty Queen Victoria.)」とあるように、当時の政府や報道に下賤とされた職人や芸人にイギリスの自由な風を見せて、そこから日本が変わることを望んだのであろうか。真相はわからないが、『Japan, past and present』に見られるのは、全体を通してオタケサンの日本の興隆を望む姿であり、実際に本人が日本人村に意図していたことは、日本の益となることだったのだろう。

5. おわりに

タンナケル・ブヒクロサンは1867年には妻オタケサンと共に興行をしており、1867年のオーストラリア興行の時点で、日本を海外に紹介するというアイデアを思い付き、実行していた。郵便報知新聞の日本風俗博覧会についての記事によれば、タンナケルは長崎、神戸の両港に長く在留して日本の風俗を熟知していたといい、またオタケサンは日本人であり、そのことから日本村興行への下地は十分に備えていたが、1867年の興業から日本人村の興業が実現したのは1885年である。その間18年で、この18年の間に最初のアイデアを発展させていき、具体化させたのである。

ブヒクロサン夫妻がイギリスを活動の拠点としたのは1868年の暮れからである。オーストラリア興行後のイギリスを拠点として活動を調査すれば、日本人村興行へのプロセスはより明らかになるだろう。

1885年1月10日にイギリス、ロンドン・ナイツブリッジで興行を始められたタンナケルの日本人村は、途中ドイツのベルリンでの興行を挿んで1887年まで続けられた。日本人村は日本人からは冷ややかな視線にさらされ続けたが、欧米での関心は高く、日本人村の興行前にイギリスのプレスだけでなく、Newyork Times¹⁶に記事が載る程であった。タンナケルの日本人村以後、欧米では日本人村の興行や日本館等類似した興行が数多く行われた。その中にはアールスコートの日本村や日英博覧会の余興部のような傑出したものがある。アールスコートの日本村はイムレ・キラルフィのロンドン博覧会会社、日英博覧会の余興部はイムレ・キラルフィの要請による英国人を中心としたシンジケートによって準備されたもので、芸人による芸の上演や職人による実演を行うという物でタンナケルの日本人村とほぼ同様のものではあった¹⁷。余興を計画した英国人は25年前の日本人村の好評を意識したに違いない。この日英博覧会の余興は、タンナケルの日本人村同様に欧米からは好評を、日本人からは批判を受けた。1885年から1887年にかけてロンドン・ナイツブリッジで行われた日本人村と、1910年のロンドン・シェパーズブッシュの余興がほぼ同様の興行を行い、同様の評価を受けたのである。これは極めて興味深いことであり、タンナケルの日本人村は強い印象を欧米人に残していたのである。タンナケルが1867年には思い付き、1885年に実現したアイデアはこれほどまでに大きなものだったのである。また、その完成には妻オタケサンの協力が欠かせなかったのである。

- 1 ロンドンの日本人村同様の興業がアメリカやオーストラリアで行われていたようである。
倉田喜弘 朝日新聞社 1983「日本人村・アラウンド・ザ・ワールド」『1885年ロンドン日本人村』
ほかに、アラスカユーコン太平洋博覧会に「Japanese Village」、日英博覧会の余興部等に見える。
- 2 郵便報知新聞による報道の他に、外務省浅田交信局長と神奈川県令沖守固の間で日本人村を危惧するやり取りがあり、日本人村が始まってからは東京日日新聞等他の新聞でも在英邦人の声として日本人村を批判する内容の報道がなされている。
倉田喜弘 朝日新聞社 1983『1885年ロンドン日本人村』
- 3 日英博覧会開催前に、時事新報1910年3月9日に「下等階級の芸人又は職工等の多数を彼地に渡航せしめ公衆の観覧に供するの利害如何は大いに考慮する所なかる可らず」という記事が載ったほか、開催後には、「日英博覧会見物追記」（『太陽9巻6号』1910年5月）等に余興部の日本人村の様子を批判する内容がでていいる。
- 4 郵便報知新聞 1884年7月26日朝刊「日本風俗博覧会」
- 5 郵便報知新聞 1884年7月28日朝刊「日本風俗博覧会に属する問題」

-
- 6 郵便報知新聞 1884年 8月20日朝刊「英人との対話」
 - 7 郵便報知新聞 1884年 8月21日朝刊「英人との対話」
 - 8 David C.S/Sissons 1999 “Japanese acrobatic troupes touring Australia 1867-1900”
Australasian Drama Studies, Vol 35, pp.74-5
 - 9 郵便報知新聞 1885年 3月25日朝刊「龍動通信」
 - 10 角山栄 1988「ロンドン「日本人村」の謎」『科学朝日』朝日新聞社
 - 11 Manchester Guardian 1983年12月26日
 - 12 同
 - 13 三原文 2008『日本人登場』松柏社 pp.24
 - 14 同 pp.67
 - 15 角山栄 1988「ロンドン「日本人村」の謎」『科学朝日』朝日新聞社
 - 16 Newyork Times 1885年 1月 6日
 - 17 有山輝夫 2002『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館 pp.212-217